

梅ちゃん先生と昭和のジオラマ風景

「梅ちゃん先生」はつたなさをちりばめる作風が大成功し、妙な面白さ、新鮮な魅力を持つに至った。過去4作品をしのぐ高視聴率は、この朝ドラの圧倒的な人気と評価を物語る。タイトルバックも好評！主演・堀北真希はもちろん、脇を固めるベテランなどの役者はいずれも熱演である。



山本高樹(たかき)1964年6月22日、千葉県生まれ、48歳。日活芸術学院美術科卒業後、映像美術制作会社で活動。玩具CMなども手がけた。2001年からレトロジオラマの製作を開始。02年、第1作の「モダン都市 銀座」が北原照久さんに買い上げられ、『電撃ホビーマガジン』や『荷風!』の連載も評判を得る。04年、東京都青梅市に作品を常設した「昭和幻燈館」を開館。「連続テレビ小説『梅ちゃん先生』番組展」は入場無料。7月24日から30日まで、日本橋高島屋でも開催された。また、10月18日～には同じく日本橋高島屋で山本氏の全作品を集めた作品展が行われる。



東京・蒲田を舞台にしたNHK朝の連続テレビ小説「梅ちゃん先生」。そのタイトルバックに映るジオラマが好評。昭和の郷愁を誘っている。製作者は昭和39年生まれ、48歳の山本高樹。小道具を作り続けてきた。コンピューター化が進みアナログ作家の出番が少なくなったがこのタイトルバックで再見直される。

町の朝から始まり、川や船がやって来る。梅ちゃん先生が出てきて、挨拶をする。生活感のある風景。夜がきて朝がくる。朝のない日はない！月曜日から土曜日まで6パターンある。月曜日には四季の変化が入っている。普段は70秒。

そんな昭和レトロの味わいが「山本ジオラマ」の真骨頂。「梅ちゃん先生」のタイトルバックの担当ディレクターが、昭和を表現したいと思案したとき、山本作品を思い出した。ジオラマ製作の依頼がNHKからきたのは、2011年8月。その時、米国のメンフィスにいた。「ドラマに僕の作品は合わないと思っていたのですが、タイトルバックに使うと聞いて、やりたいなと思いました。非常に楽しくやれましたね。下町の風景が」再現できた。製作は全部フリーハンドです。窓やドアは規格が決まっているから、ヒノキ材を使って、建具を作ってから、どんな形の家にするか決めました。

大阪万博以降、日本がどんどん変わっていった時代。ジオラマには人形が沢山出てくる。割烹着の人、酔っ払い、行商人、お地蔵、虚無僧、紙芝居の人、街頭テレビ。テレビ画面の中味は昼と夜では違い、昼間は「ひょっこりひょうたん島」、夜は「巨人軍、長島選手の天覧試合」。猫も何度か登場。土曜日は梅ちゃん先生が転んでいる。

約3カ月で約20軒、60体の人形が完成。大変だった。ジオラマの大きさは幅2メートル、奥行き1・4メートル。自宅では広げるスペースがなく、3分割にわけて作成。自分が作った作品では最大クラス。縮尺はこれまでの作品と同じ、約25分の1。ただ、デフォルメをしているので精密な縮尺ではない。撮影は2011年12月、8日間かけて行われた。

2012年9月29日が最後の放送。打ち上げパーティーが300人ほど参加して行われた。お父さん役の高橋克実さんが、「タイトルが本編にまけず素晴らしい！」と言ってくれた。

子供のころは東京・武蔵小山に暮らし、子供の頃からマニアックでサンダーバードやウルトラマンなどの特撮映像の影響を受けた。「高校時代には映像の世界でもものづくりをしたい」と決めていた

20代は映像美術会社でCM撮影などに取り組む一方、趣味の超合金ロボットのコレクションのためにデッドストック(長く倉庫に置かれた商品)を探して地方を訪ね歩いた。「乗鉄」の趣味もあったので一石二鳥でした。そのときに日本の古い風景に出合ったんです。

こういう原風景をジオラマに作って残したいなと思うようになり、嗜好が変化した。新たな世界が広がった。一方で、これまでの仕事の環境は激変。「NHKのスペシャル番組の特撮美術も制作していたが、特撮がCGばかりになって、模型部門が閉鎖されることになった」

せっかく丁寧に作ったセットが壊されてしまうという仕事にも、なじめなくなっていた。

36歳で退職し、フリーで活動開始。東京の街を歩き、永井荷風の随筆『日和下駄』にも親しんだ。永井荷風を模した人形が街角に立ったジオラマを作ってみた。作品を雑誌に投稿したところ、玩具コレクターの北原照久さんの目に留まり、それが世に出るきっかけとなった。「駆け出しのときに北原さんに買ってもらったのが励みになりました」。

日本の古い町並みが好きで、全国を歩き写真をとっておいた。古い家はオーラーがある。そこで日本の古い風景を模型にする仕事を始めた。昭和の古い風景をモチーフにしていると心が落ち着く。バブルがはじけ景気が悪くなる2001年以降、レトロブームがきた。子供の頃は未来都市にあこがれた。お台場ができ、六本木ヒルズができたが感激がない、落ち着かない。昔の方がいい、心が穏やかになる。金がなくても愛は持てる。バブルがはじけ、今は等身大に戻ってきたと思う。

娘は4歳、絵を描くのが好きなので、いつもほめてあげる。好きなことを見つけるのが大切。

ジオラマを見たいという人が多く、日本橋高島屋で10/18から展示会を開催。60体の人間が出てくる。そこに住む人間の暮らしがテーマ。飲み屋、風俗街、ダメな人をつくるのが好き。永井荷風の「墨東綺譚」のジオラマも作っている。荷風は江戸の情緒を求めて東京の町をブラブラ歩いていた。自分は千葉の本八幡の生まれ、荷風は晩年、本八幡に住んだ。父は荷風が浅草に出かける姿を見ていた・・・と言っていた。

昭和の始め頃、カフェは文化人の社交場だった。自分は永井荷風に引かれる。三ノ輪の投げ込み寺に荷風が言葉を残している。人情のある人だった。

今後、地方のローカル風景を模型にし、人の営み感を表現したい。